津田昇平教話　第二六話

令和三年一月二六日　朝の教話

おかげをおかげと気づかせていただく。

おはようございます。令和三年一月二十六日の朝をお迎えさせて頂きました。

信心いたしまして、おかげを頂く。これは天地（てんち）の道理（どうり）やと思っておりますし、信心しておかげがないということの方が不思議なわけです。けれども、信心させて頂いているけれども、なかなかおかげが頂けない。他の人は皆おかげ頂くのに、自分はどうしておかげ頂けないのかというふうに思うこと、思う時期も信心しておりましたら、そんな時期もあるように思いますね。

けれどもその時は、神様がおかげを用意して下さろうと手筈（てはず）して下さったり、多くの場合はこちら側を待って下さっていたり、あるいは、す

でにおかげは授けてあるのに、それがおかげとよく分かっていないとかね。おかげをおかげと気づいていない。こういうことってあるなぁと思いますね。その時は本当にこう、もうすでにおかげは下さっているんだけれども、自分自身がその認識（にんしき）がないものだから、ありがたいということもよくわからないし、神様の方とされても、せっかくおかげを授けているのに気づいていないものですから残念ですよね。共に残念です。だから、大事なのは頂いているおかげというものに、気づかせて頂くということが大事やなぁと思います。

自分が思い描いたような、願ったようなおかげ、そのままかどうかはわかりません。それはもっと先かもしれないですよねぇ。でも、今は今

の時点で、今の状況の中で、最大限のおかげは用意して下さったりする。それを自分も受け取っている。けれども、これはそんなにまあ、おかげとは思っていないということもあるんですね。相済(あいす)まないことですけれども、やっぱりあるように思います。

教祖様のお広前(ひろまえ)に、ある漁師の方がお参りをされましてね。最初は、すごく信心熱心になさっていたんですよ。ところが、信心熱心に最初はしていたけれども、家のことが都合良くいかなくなりましてね。お商売のことも上手くいかなくなった。それで「当分、信心をやめます」と。だから「お社(やしろ)を預かって下さい」と、教祖様のお広前に来られたんですね。

金光様はどう仰ったかと言ったら、「まあ、それもよかろう。またいる時には、いつでも取りに来なさい」と申された。

そうすると、それから十年ほど経ちまして、その方がまたお参りに来られましてね。このようにお届けした。「金光様、良い都合にいきません。信心している間は、どうにかこうにかいっておりましたが、信心をやめてからは借金ができました」と、こう言ったそうです。すると、金光様は、「さぁ。持ってお帰りなさい。」と言って、持ち帰らせて下さったと。

その翌日、前のお殿様がいらっしゃったんでしょう。元の殿様の娘さんがご病気で、その人の所に願いに来られた。神様にお願いしてあげた。すると、娘さんも早速おかげをいただかれたと。

まあ喜んで、お礼を持ってこられた。それでまた、しっかり信心する

ようになって、結果として、借金も全て返すことができた。

岡山の漁師で、はじめは信心に熱心であったが、家のことが都合よくいかず、「当分信心をやめますからお社を預かってください」と言って持って来た人があった。金光様は、「それもよかろう。またいる時にはいつでも取りに来なさい」と申しそえておかれた。

その人が、また十年ぶりに取りに来て、「金光様、よい都合にいきません。信心している間はどうにかこうにかいっておりましたが、信心をやめてからは借金ができまし

た」と言ったから、「さあ、持ってお帰りなさい」と言って持ち帰らせなさった。その翌日、もとの殿様の娘ごの病気をその人の所へ願いに来、その人が神様に願ってあげて、さっそく娘がおかげをいただかれ、たくさんにお礼を持って来られた。それでおかげをいただいて再び信仰するようになり、借金はすべて返せた。

【理Ⅱ　近藤藤守　一三】

ということが教典に載(の)っております。まあ、エピソードですね。つまり、最初はこの人は信心熱心にしていたけれども、自分が思ったような

おかげが頂けなかったんですね。お商売やったと思います。でも思うようにいかなかった。思うようにというのは、こう自分が思ったようにということなんでしょう。もっと商売繁盛（はんじょう）してほしい、もっともっと今なんかよりも、とか思ったかもしれませんし、そもそもはお商売も立ち行かんかったけれども、信心するようになって、なんとかこう、かつかつにはできるようになってた。でも、本人はかつかつを願っているのではなくて、もっと大きなおかげ、自分が思うようなね。つまり、もっともっと繁盛して大きく手広くできるくらい、そんなおかげいただきたいと思ったのかもしれませんね。だから一生懸命、熱心に最初は参っていたけれども、やっぱり思ったようにおかげにならんから、だから、ちょっと

しばらく信心やめようと思います言うて、お社、持って来られた。

で、十年経ったと仰いますね。十年経ったらお参りに来て、前は十年前ですね。なんとかかんとか回っていた。かつかつで回っていた。ところが信心をやめたら、それが回らんようになった。そして、借金まで増えた。立ち行かんようになった。お商売のことにしても、家のこと全部に関わってくるでしょうね。そうしてお参りに来られたので、金光様は「そうか、そうか」と言うので、「じゃあ、持って帰りなさい」って、お社を持って帰らせて下さった。

そして、そこからもう一度信心させて頂く心になり、すると、そこから結果としては、まあ途中は省いていますけれど、どんな信心されたか

というわけではないですけど、そこからもう一度信心するようになったら、おかげ頂いて借金を全部返すことができた。

じゃあこの人は、借金をする前の十年前の信心に戻ったのか、それとも十年前の信心より、もう一回り大きくなったのかってことをまあ考えると、おそらく十年前の信心よりも、ちょっとおかげは頂けるでしょうね。信心は大きくなっているんちゃいますか。

だって、まあ、おかげはすでに頂いていたけれども、思ったようなおかげは頂けていないと当時は考えていて、その分、お礼は無いですわね。ありがたいとはいう心がどんだけあったか、それが上手くいかんかったから、おかげになっていると思わんから、お社も返しに来たんでしょう。

けれども、実際のところ十年間経ってみたら、これは違ったなぁと。信心していても都合良くいかずに、おかげになっていなかったと思っていたけれども、あれは間違っていたなぁと。信心させて頂いていたから、なんとかかんとか、どうにかこうにか、立ち行いていたと。そのことに気づかされた。そこからまた信心するようになったんですね。ってことはですよ。おかげを頂いていなかったと勝手に思い違いしていたところが、実はもうおかげを頂いていて、そしてあの状態やったんやなぁということが分かったら、まあ、その十年ぶりに来た時の状況はその当時より悪いですわね。もう借金もできているんですからね。おかげを頂いていたのに、もう頂けなくなったと。

でも当時はというたら、そんなおかげ頂いていないと思っていたんでしょう。でも今になったら「あれは自分のえらい心得(こころえ)違いやったなぁ。本当はおかげ頂いていたから、なんとかかんとか自分のような者でも立ち行いていたんやなぁ」という心になって、そして神様に、まあどうでしょうね、ここには書いていないですけど普通に考えて、お断り申して、お礼を申し上げて、そしてここからの事をお願いさせてもらってっていうようになったら、また立ち行くようになって借金が返せるようになった。これで、借金が返せたという状態であれば、前と同じくらいかもしれませんけど、でもそこから自分の失敗を経験していますので、またこれで前に戻ってしまう可能性もありますわね。あるんです。それもあり

ます。

借金がなくなったら、やっぱり「もっと、もっと」ってなる。「もっと、もっと」は結構やけれども、今頂いているおかげ、借金がない状態、なんとかかんとか、どうにかこうにか立ち行いているということが、もうすでにおかげなんだということが、この人がどれだけよく分かっているかどうかでしょうね。これ、分かっていたら今の状況に不足は無いし、むしろこの状況でも、「本当におかげ頂いてありがとうございます」という心でしょう。今頂いているおかげがありがたいなぁって真に分からせてもらったら、やっぱり器（うつわ）ができますね。十年前よりも器は全然大きいですね。ってなると、次のおかげはより頂けますでしょ。って考えたら、借

金返せるだけじゃなくて、貯金もできるようになっていくでしょうね。これはまあ、天地（てんち）の道理（どうり）やと思います。

そういうことを思うと、信心していて思ったようにいかない時。思ったようにっていうのは、あくまでも自分の物差しで自分の考えるおかげ、それはいつとかね。いつ、おかげになるのかとか。これくらいのとか。自分の思い描くようなおかげであったりね。

そうとは、現実におかげは頂いても、自分の思い描いていたとは違うことでも、本当はもうすでにおかげは頂いてある。もっとおかげ頂こうと思ったら、実はその人の心の器が上手くできていなかったんですね。

まあその時なりの器で頂いていたけれども、頂いていたものが、ありがたいなぁと気づいたら、もっと早くおかげ頂いていたわけですね。十年もかからんで済んだんでしょう。でも、それが気づかずに、信心もやめてしまった。

でもまあ、のちのち偉(えら)いのはね、十年経ってやっぱり「これはあの時、信心やめさせてもらったからやな。おかげ頂いていたんやなぁ」って気づかされたからお参りに来られた。ゼロからプラスというのではなくて、マイナスやったんでしょう。マイナスからゼロにして頂くだけでも、よほどプラスを足してもらわなかったら、マイナスはゼロにはなりませんのでね。でも、これでゼロになって、なんとかゼロで維持できていると

いうことが、どれほど本当はありがたいことなんかということは、またマイナスにならんと分からんということです。

でも、神様は別にマイナスになってほしいわけじゃなくてね。せっかく授(さず)けたおかげを返すような真似はしてほしくはないわけですけれど。でも、残念ながら授けたおかげをお返しするような人が、まあおりますわねぇ。相済まんことですけれども。そうならんように今の今も神様からおかげは頂いている。その頂いているということ、信心しておかげが無いということはないですから、神様にお縋(すが)りして神様に手合わしてね、それでおかげが無いということはないです。本当は頂いているんです。日々ね。信心していない時よりも、ずっと頂いているはずです。

ただそれが思ったとおりの、あるいは思った以上のおかげ頂いていると感じるか、あんまりと感じるかによって、こらぁまあ全然違いますわねぇ。もっと自分は頂けるはずやと思っているのか。いや、もう自分なんかがこんなおかげ頂いて立ち行くこと自体がもう奇跡（きせき）ですっていうふうにして、ありがたく頂くのか。同じおかげを授けてもですよ。当たり前ととるか、ありがたいなぁととるか、それはその人の心一つですね。

でも、神様としたらもう精一杯おかげを授けて、この人の器に入るだけ、てんこ盛りではやっとると。でも本人は「もっと、こんなんじゃぁ」と思ってるかもしれない。でもそれって、その人の器がちっちゃいだけ

の話ですんでね。器をもっと大きくすりゃぁいいんですよ。頂いたおかげ、ありがたいなぁと思って、勿体ないなぁと思ってね、お礼してたらいいんですけど、結局この人も自分自身が見えてなかったんでしょうね。分かっていなかったんでしょう。自分はもっとおかげを頂けるはずやとくらいに思っていたんでしょうね。でも、そんな器を自分自身が作っていなかったんです。

でもまあ、十年かけて自分の足りないところというのがお気付け頂いて、そこからまた心を入れ替えて信心させて頂いて、で、返済までおかげいただいた。まあ、こっからが大事なんでしょうね。ここから、これまで苦しかったこと、今おかげ頂いてありがたいこと。この二つを忘れな

いように信心していけば、もっとおかげは頂けるでしょう。それは絶対そうですよ。

で、これまで苦しかったこと、難儀（なんぎ）したっていうことは、この十年間かけてね、この人も難儀（なんぎ）した。じゃあそれは、おかげを頂けないような生き方、心のあり方、心の器、性根（しょうね）、信心になっていたということ、まあこの人、信心離してますけど、それがおかげを頂くようになったということは、おかげを頂くような信心に、心のあり方に、生き方に、心得になってたということですね。それを忘れずに、ここからもそのまま続けてもらったらいいですよね。

そしたらこれまでよりも、もう一回り、二回り大きな器になるから、

そしたらまたおかげを授けることができますもんね。まあそういうことは本当によくあるなぁと思います。私たちでも信心してたら思ったようにおかげ頂けないと思い違いしていることは、やっぱり多いと思いますね。こちらが思うには「あんた、大概(たいがい)おかげ頂いているけどなぁ」と思うんですけど、本人は最初はありがたいと思ってね。苦しいのも「喉元(のどもと)過ぎたら」と言いますけど、頂いたおかげも案外ね、喉元過ぎたらにしている人は多いような気がしますね。「あんた、ほんと、そんなこと言える人間ちゃうやないか」って言いたくなること、多々あります。「今こうして、あんた生きてるだけでも、どんだけのおかげ頂いてると思ってるんや」ってこっちは思うんですけど、本人が「はぁ」という感じですもん

ね。「いや、まあ、そうなんですけどね」とかね。分かっているようで、分かっていないんでしょうね。

つまり、自分が自分のことを忘れてしまっているんでしょう。気づいてもらいたいと思って話をしても、「はぁ、そうでした、そうでした」って言って、パッて分かったらいいですけど、なかなかね。難しいもんですね。まあ、そないなったら、またどっかで頭打ったり、おかげ落としたりして気づかされんとしょうがないんでしょうね。あんまりそういうの見たいわけじゃないですけど。ほんま、まあ人間が成長する上では必要なことかもしれません。そういうことを繰り返しながら、自分という人間がどうすれば、どういう心であれば、本当の意味で助かり立ち行くよ

うな人生に、生き方になるのかということを見つめないといけない。立ち止まらないといけないというところも、まあありますわね。それも、あります。そうじゃないと成長できないということも、それも本当ですね。一本調子っちゅうわけにはいきません。三歩進んで二歩下がる、二歩下がっても一歩進んでるから、まあそれでオーケーという、それもほんとですね。

でも、まあ失敗は失敗で生きてたらあるんですけれども、そこから、ほんまに学ばんとあきませんね。同じ失敗、繰り返してるようじゃぁ、こりゃあきませんわね。教えてる甲斐(かい)もないですよ。本人もこうして、お広前(ひろまえ)に参らせて頂いて習い事してるのに、あんまりこう成長せんかっ

たらね、甲斐もないでしょうしね。まあ、神様はおかげを授けようといつもして下さいますんで、そのおかげをしっかりと頂けるように、この身、この心を神様に向けて信心させて頂きたいものですね。

「枯(か)れ木にも花が咲(さ)くし、ない命でもつないでいただける」と仰って下さる。でも、そうやって、枯れ木に花咲かせてもらったりとかね、ない命つないでいただいてって言っても、喉元過ぎたらっていうことがあるのが人間でね。相済まんことですから、これまで苦しかったことと、今おかげ頂いてありがたいことと、この二つはやっぱり忘れないようにしておかんとあかんなと思いますね。ほっとったら忘れてしまうって、教祖様仰いますからね。

だから、忘れんように、忘れんようにって、ご理解下さるわけでしょう。人間は忘れるもんなんやと思ったら、まあそんな教えはないんですけど、まあ相済まんことが起こってくるぞと。さぁ、おかげを頂いたらどうやみたいなね。いろんな教えがありますから。残っていますからね。だから、信心の初めを忘れんようにというところが大事やなぁと思いますしね。

皆さんも今の今、どんなことをこう、日々願われておられるか分かりませんけれど、でも、信心させて頂いておかげを頂かないということはないですから、今の今だっておかげは頂いておられます。もっとって思

うんであれば、それはそれで結構ですけれども、でも、そもそも今まで頂いてきたおかげをどれだけ真にありがたしという心で頂いておられますかね。ほんとに、それだけ頂いたおかげにふさわしいだけ喜ばせてもらっていますか。

「喜び上手のお礼上手」ができているかどうかですよね。そこは自分自身、ちょっとよう立ち止まって考えんといかんことやなぁと思いますよ。それはよう分かっていないということになりますからね。苦しかったことが、よう分かっていないんでしょうし、頂いてありがたいことも忘れてるんでしょうしね。それじゃあ、ほんとに相済まんことですから、神様が授けて下さったおかげを、おかげとしてよく認識できるように、

そのために立ち止まって、振り返って、ということが大事になってきますね。そのための信心、参拝、ご祈念、御取次(おんとりつぎ)かなぁと思います。

まあ、どうぞそれぞれ、今日一日神様からまっさらな一日を頂いておりますので、それぞれの抱えている背景はあるにしても、状況はあるにしても、しっかりと心を神様に向けて、神様にお礼申して、お詫び申し、お縋(すが)りしながら、神様と一緒に今日一日をおかげの中で生活させてもらって、神様と共に生きるお稽古(けいこ)をさせて頂きたいなと思います。

どうぞ、おかげ頂いて下さい。よくお参りでございました。

（了）

津田昇平教話　第二六話

令和三年一月二六日　朝の教話

発行日　令和六年二月二十七日

発行所　金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五